

コーパスに見る中日翻訳における「明示化」の特徴

— 雑誌の時事報道記事を中心に —

劉 明綱

(名古屋大学大学院・国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程)

This study aims to investigate, using corpus-based approach, the phenomenon of explicitation in Chinese–Japanese Journalistic translation, which is considered a “universal feature” of translated text. It, first, analyzes translation process with a parallel corpus composed of Chinese original texts and Japanese translated texts, and then examines translation product with a comparative corpus composed of translated and non-translated texts in Japanese.

The result shows that high frequency of explicitness was found in translation process, that can be sorted into 6 categories: 1) referent manifestation; 2) cohesive reinforcement; 3) emphasis; 4) implication spelling out; 5) background information explanation; and 6) syntax-element supplementation. It was also found that translated texts tends to be more explicit than non-translated texts in the same language, by measuring with the following 3 indicators: 1) mean sentence length; 2) lexical variety with type/token ratio; and 3) the quantity of conjunctions.

1. はじめに

翻訳は言語を媒介とする仲介的な伝達活動であり、その両端には起点言語と目標言語が存在する。翻訳の第一歩は、起点言語にある情報、つまり、原文の作者が伝えようとする意味を正確に汲み取ることである。しかし、言語の情報には明示的なものと暗示的なものがあり、「翻訳者は原文の表層から見て取れる意味のみならず、その深層に潜む含意も正確に洞察しなくてはならない」(王, 2005: 11)。

コミュニケーションにおいて、なぜ暗示的な情報が潜んでいるかに関して、范(1996:133)は「暗示的な情報は話し手と聞き手の間の『共有知識』であり、お互いの負担を軽減させるため、いちいち詳述する必要はない」と説明している。しかし、原文と訳文を仲介する役割を果たす翻訳者にとって、原文と訳文の読者が共有する知識の度合いというのは、判断が難しいもの

でもある。そこで、円滑な情報伝達を実現させるため、翻訳者はしばしば原文に潜む暗示的な情報を、訳文において明確且つ具体的に訳出することがある。これが、いわゆる「明示化」である。

本稿は、この翻訳テキストの普遍的な特徴の 1 つと言われている「明示化」に着目し、「コーパスに基づいた翻訳研究」というアプローチを用いて、中日翻訳における明示化について考察するとともに、それが確かに「普遍的な特徴」であることを立証する。

2. 先行研究

2.1 コーパスに基づいた翻訳研究

従来の翻訳研究では、翻訳テキストそのものの本質を解明することよりも、むしろ技術的な方面に目が向けられており、訳文と原文とが「等価 (equivalence)」の関係を維持しているかどうかという点に大きな注意が払われてきた。つまり、伝統的な翻訳研究においては、「原文の卓越性 (the primacy of the source text)」(Baker, 1993:236)が強調され、原文を忠実に訳すことが原則であった。

こうした中、Toury (1995) が提唱した「記述的翻訳研究 (Descriptive Translation Studies, DTS)」が、このような状況に変化をもたらした。翻訳者が従うべき規準を制定するという従来の「規範的翻訳研究 (Prescriptive Translation Studies)」とは異なり、「記述的翻訳研究」を支持する研究者は、翻訳の現象そのものを調査する必要性を強調し、「翻訳の実態を記述し、翻訳が生産された文学的、文化的及び歴史的な背景と関連付けて、その特徴を観察する」(Kenny, 2001:49)ことを主張した。DTS の発展により、翻訳テキストは徐々に原文の束縛から解放され、独立した対象として研究されるようになった。

1990 年代初期、Mona Baker は「記述的翻訳研究」の概念を、当時主に言語学で使われていたコーパスと結合させ、コーパスに基づいた翻訳研究 (Corpus-based Translation Studies, 以下、CTS) という研究手法を提案し、実証的な観点から翻訳活動を系統的に記述・研究することを唱えた。これまで Baker (1993, 1995) は、翻訳テキストには以下の3つの普遍的な特徴が存在可能であるとしている。それは、簡素化 (simplification)、正規化 (normalization)、そして本稿の研究対象である明示化 (explicitation) という3つの特徴である。

2.2 明示化

翻訳研究において、いち早く明示化という概念を提唱したのは Vinay and Darbelent (1958) である。彼らの研究によると、明示化というのは、「原文に潜んでいる情報を、訳文に表出する過程であり、その情報はコンテキスト及び場面状況から得られるものである」(p. 8)。そして、「明示化について最初に体系的な研究を行ったのは、Blum-Kulka (1986) である」(Klaudy 1998:83)。Blum-Kulka (1986) は、いわゆる「明示化の仮説 (explicitation hypothesis)」を提唱し、「翻訳のプロセスを通して、訳文は原文より冗長になる傾向があり、その原因は原文より訳文のほうが結束性において明示的であることに由来するという。この明示化現象は、テキストの

構造や言語の組み合わせに関係なく、翻訳プロセスに内在されているものである」と主張した(2000年の再版 p. 300より引用)。この主張に対し、Séguinot (1988:108)は、「明示化は、必ずしも冗長を意味するというわけではない」と述べ、付加(addition)が明示化の唯一の手段ではないと反論している。彼女は、「原文になかったものを、訳文の中に表出する」ことは確かに明示化ではあるが、そのほかに「原文に含まれる意味や、前提として理解されていることをあえて訳出するか、原文のある要素に焦点を当てたり、強調したり、ことばを選択することによって、訳文の中でそれらの部分を際立たせる」(ibid.)ことも一種の明示化であると主張した。

コンピュータ技術の発展により、1990年代から、翻訳研究の分野においても大量の資料を処理できるツールや方法論が徐々に確立されるようになり、大規模な電子データによるこれまでの明示化に関する理論の検証や新たな理論の確立が可能となった。

こうした中で、Blum-Kulka(1986)が提唱した「明示化の仮説」を検証するため、Øverås(1998)は英語とノルウェー語の双方向パラレルコーパスを用いて、翻訳プロセスにおいて、訳文が原文より冗長且つ明確になっているかを調査した。その結果、2つの言語いずれの訳文においても、明示化の傾向が見られたと報告している。これは明示化現象が言語の組み合わせとは関係なく、翻訳のプロセスに内在するものであることを意味し、Blum-Kulka (1986)の仮説を裏付ける結果となった。

そのほか、Pápai (2004)は、パラレルコーパス及び比較コーパスの両方を用いて、英語からハンガリー語に翻訳する際の明示化について調査を行った。その結果、「英語原文」及び「ハンガリー語訳文」からなるパラレルコーパスにおいては、明示化現象が「論理的・視覚的(logical-visual)」、「語彙-文法的(lexico-grammatical)」、「統語的 I(syntactic I)」、「統語的 II(syntactic II)」、「テキスト及び言語外(textual & extra-linguistic)」という4つのカテゴリで見られたと報告している。一方、同じハンガリー語の「翻訳テキスト」及び「オリジナルテキスト」からなる比較コーパスにおいては、句読記号、接続詞、前方照応、派生語、TTR などの明示化の指標で量的に検証し、いずれの指標に関しても、翻訳テキストにおいてより高い頻度を示したと指摘している。

日本語に関する研究については、最初に日本語における明示化の研究を行ったのは、花岡(2000)である。彼は英語のニュース番組の内容を、通訳と翻訳の性質を併せ持つ日本語の時差通訳と対照することで、英語を日本語に訳す際の明示化現象を分析した。その結果、「構造的拡張」、「余剰的表現」、「暗示的情報の明示」、「接続詞」及び「指示対象の明示」という5つのカテゴリにおいて、明示化が見られたと報告した。

そして、花岡(2001)は、研究の対象を通訳から翻訳に移し、時事問題に関する雑誌記事の英文和訳の記事を分析し、さらにその結果を花岡(2000)の結果と比較し、通訳と翻訳における明示化の違いを考察した。その結果、全体的に、通訳より翻訳のほうでより頻繁に明示化が用いられていると主張した。

王(2005)は中文和訳、和文中訳という2種類の同時通訳を対象に考察した。また、話し言葉と書き言葉という文体の違いが、明示化にどのような影響を与えるかを検証するため、同じテキストを訳文の言語を母語とした翻訳者にも訳してもらい、通訳の結果と対照分析した。分析の

結果、言語の組み合わせに関しては、中文和訳より、和文中訳のほうでより頻繁に明示化が用いられている。通訳の形態に関しては、即席同時通訳より、テキスト付同時通訳のほうでより頻繁に明示化が用いられている。そして、文体に関しては、書き言葉の翻訳より、話し言葉の通訳のほうでより頻繁に明示化が用いられている、と報告した。

以上、先行研究を概観してきたが、全体として、データの種類、文字数、明示化の例が少ないため、各研究で示唆された傾向を、そのまま通訳・翻訳の分野で一般化して述べることは難しい。また、中日の翻訳を対象とした研究もなかったため、本稿では、コーパスを利用し、中日翻訳のプロセス及び翻訳テキストそのものにおける明示化について考察したい。

3. 研究目的

本稿では、Baker(1993)が提唱した「翻訳の普遍的な特徴」の中の明示化に焦点を当て、中国語を日本語に翻訳するプロセスにおいて、明示化の戦略が採用されるかどうかを検証していく。また、日本語翻訳テキストそのものにおいて、明示化の特徴が見られるか否かについても明らかにしたい。

上記に基づき、本稿では以下の2つのリサーチクエスチョンについて考察し、それを解明することを目的とする。

- (1)中国語を日本語に翻訳するプロセスにおいて、明示化の現象が見られるのか。もし見られるならば、それはどのような形で現れるのか。
- (2)Baker(1993)は明示化が「翻訳の普遍的な特徴」と主張しているが、本研究の日本語の比較コーパスにおいても、明示化の傾向は見られるのか。

4. 研究方法

本稿の目的は、CTS の手法を用いて翻訳の普遍的な特徴の1つと言われている明示化について考察することである。質的分析及び量的分析を行うために、本研究では、中日パラレルコーパス及び日日比較コーパスという2つのコーパスを構築した。

4.1 コーパスデザイン

本研究で使用するコーパスは、「中国語原文」と、それを日本語に翻訳した「日本語訳文」及び「日本語オリジナルテキスト」の3つのサブコーパスから成っている。この中でも日本語訳文は2つの役割を果たしており、一方は中国語原文と組み合わせて「パラレルコーパス」を構成し、もう一方は日本語オリジナルテキストとペアで「比較コーパス」を構成している。

4.1.1 パラレルコーパス (Parallel Corpus)

中国語を日本語に翻訳するプロセスにおける明示化の特徴を探り出すために、本研究ではまず、中国語原文とそれを日本語に翻訳したテキストから成る中日対照の「パラレルコーパス」を構築した。

使用する言語データとして、台湾行政院新聞局発行の中日対照月刊誌——『光華雑誌』¹⁾

を採用した。『光華雑誌』は、台湾の政治、経済、社会、文化、科学技術などを全般的に紹介・宣伝する目的で出版されている月刊誌であり、中国語の原文と対訳の日本語テキストから成っている。今回採用したのは、『光華雑誌』計 29 冊(2006 年 1 月号～2008 年 5 月号)に掲載された時事報道のコラム「ニュースアイ」で、中国語の原文と日本語の訳文計 100 タイトルをコーパス資料として収録した。その構成は表 1 の通りである。

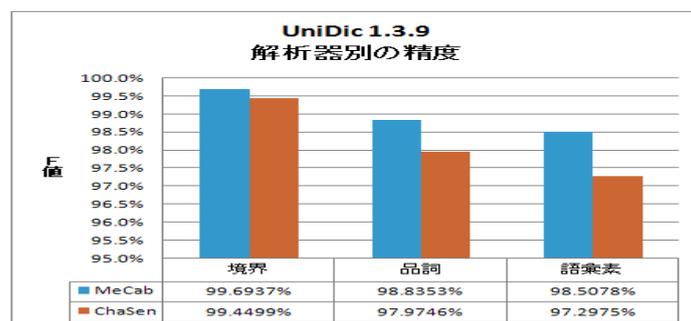
表 1 パラレルコーパスの構成

光華雑誌「ニュースアイ」	中国語原文	日本語訳文
タイトル数	50	50
文字数	82,355	103,474
形態素数	54,370	68,048
文数	1,508	1,973

ここで言う「形態素(morpheme)」とは、意味をもつ最小の言語単位であり、「語をこれ以上分割すると意味が損なわれてしまうぎりぎりの段階まで分割して抽出される音素のまとまり」(風間他 2004:33)である。

中国語の形態素解析ツールとして、台湾中央研究院資訊科学研究所所属の CKIP (Chinese Knowledge and Information Processing)グループが 1994 年に開発した「CKIP Autotag²⁾」を用いた。日本語の解析ツールとして、形態素解析エンジン「MeCab³⁾」及び形態素解析辞書「UniDic-1.3.9⁴⁾」を用いた。形態素解析エンジンには、他にも「茶釜⁵⁾」があるが、図 1 で示したように、解析精度に関しては、僅かではあるが MeCab の方が上回っているため、本研究では「MeCab」を採用した。

図 1 UniDic ChaSen 版と MeCab 版の解析精度比較



出典: 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」Web サイト⁶⁾

4.1.2 比較コーパス(Comparative Corpus)

翻訳テキストそのものの本質を解明するため、本研究では、翻訳テキスト及び一定の基準に従って選定された同じ言語のオリジナルテキスト⁷⁾から成る「比較コーパス」も構築した。

Baker (1995:234)が、「Both corpora should cover a similar domain, variety of language and time span, and be of comparable length.」と指摘しているように、比較コーパスのオリジナルテキストと翻訳テキストは、ジャンル、分野、年代及び文字数などにおいて対応していなければならない。これらの基準に沿って構築した比較コーパスの構成は表 2 の通りである。

表 2 比較コーパスの構成

テキスト	ジャンル	雑誌名	出版年代	分野
日本語翻訳 テキスト (103,474)	雑誌の時 事問題に 関する記 事	光華雑誌	2006年1月～ 2008年5月	社会 (26,710) 芸術文化 (19,781) 政治 (18,905) ビジネス (16,190) スポーツ (9,309) 医療 (5,832) 科学技術 (4,942) 学術 (2,475)
日本語 オリジナルテ キスト (103,937)		週刊 AERA 週刊朝日 週刊ダイヤモンド ⁸⁾	2000年以降	社会 (25,575) 芸術文化 (21,082) 政治 (18,541) ビジネス (16,085) スポーツ (8,446) 医療 (6,088) 科学技術 (5,291) 学術 (2,829)

註:()内は文字数

4.2 データ分析:

Chen (2003:5)は、「明示化の現象は2つの観点から観察可能である。一方は訳文と原文との対照(翻訳の過程)であり、もう一方は訳文と同じ言語で、同じ属性を持つ非翻訳テキストとの比較(翻訳の結果)である」と指摘している。また、Dominic (2001:210)は、「パラレルコーパスを用いた研究は翻訳の過程(process)を優先しているのに対し、比較コーパスを使用した研究は翻訳の結果(product)に焦点を当てている」と述べている。したがって、本稿では、二段階に分けてデータを分析していく。まずはパラレルコーパスを用いて翻訳のプロセスにおける明示化の特徴を考察し、次に比較コーパスを用いて翻訳の結果、つまり翻訳テキストそのものに明示化の傾向が存在するかを検証する。

5. データ分析の結果及び考察

5.1 パラレルコーパスに見られる明示化

5.1.1 質的分析

パラレルコーパスを用いて分析した結果、以下の「指示対象の明示」、「連結関係の強化」、「強調」、「含意の表出」、「背景知識の説明」及び「構文要素の補足」という6つのカテゴリーにおいて、明示化現象が見られた。以下では、6つの明示化のカテゴリーを実例を挙げて説明し、中日翻訳の過程における明示化現象の類型とその要因を明らかにする。例文に関しては、(a)が中国語の原文で、(b)が日本語の訳文である。ここでは、注目すべき箇所は下線、明示化に当たる部分は網掛けで標示する。

① 指示対象の明示

翻訳のプロセスにおいて、メッセージをより具体的且つ明確に伝達するため、翻訳者はしばしば文中の指示対象を明示させて訳すことがある。

まず最初に、代名詞の明示化について考察したい。翻訳の内容には、訳文の読者にとって馴染みのない物事が出現することもしばしばあるため、その認知的負荷を低減させるべく、翻訳者が原文における人称代名詞、指示代名詞等を翻訳する際、その指示対象に当たる固有名詞で訳し、代名詞を明示させる傾向が見られた。

(1a) 但 他 很 擔心，不知 這些 優勢 還 能 維持 多久？

しかし 彼 とても 心配 分からない これらの 優勢 まだ できる 続く どれくらい

(1b) だがこの優れた特質がいつまで続くかと、アン・リーは心配する。

この例は、台湾の映画監督アン・リーが台湾映画産業の振興について助言を行ったことに関する内容であるが、(1a)において主語に当たる人称代名詞「他(彼)」が、(1b)においては「アン・リー」とフルネームで訳出されている。

代名詞以外でも、原文における固有名詞の「短縮形」が、訳文ではしばしばフルネームを用いて訳されるという例も見られる。特に名大(名古屋大学)、日テレ(日本テレビ)、阪神(大阪と神戸)などのような機関・組織・役職や地理的名称は、翻訳の過程において頻繁に明示化される指示対象である。以下はその一例である。

(2a) 國科會 主委、生命科學組 院士 陳建仁 指出，台灣 受 限 於 法令，中研院

組織名 役職名 組織名 役職名 人名 指摘する 台湾 受ける 制限 に 法令 組織名
聘用 助理 研究員、副 研究員 待遇 須 比照 公務員，制度 僵化
招いて任用する 助手 研究員 副 研究員 待遇 必要 ...にならって 公務員 制度 膠着化

(2b) 国家科学委員会の主任委員で生命科学組の院士である陳建仁氏によると、台湾では法令の制限を受け、中央研究院の研究助手や副研究員の待遇は公務員と同等とされており、制度が膠着化している。

この例でも、(2a)の「國科會」、「主委」、「中研院」という組織名・役職名が、(2b)においてすべてフルネームに変えられている。訳文において短縮形をそのまま使用すると、意味が伝達されなくなってしまう恐れがあるため、短縮形がフルネームで訳出される例が多く見られる。

②連結関係の強化:

明示化に関する翻訳研究には、文の連結関係に焦点をおいたものが多数ある(Cai 2007, Chen 2003, Pápai 2004, Puurtinen 2003)。これらの研究に共通している結論としては、文章の論理的流れ及び結束性を強化するために、原文に比べ、訳文では接続詞、特定の副詞(繋ぎ言葉)及び関係代名詞などの面で、より明示化の傾向が見られるとされている。

(3a) 有人認爲，刷卡 購物 或者 預借現金，都是 使用人 在
いる 人 思う カードを使う ショッピング あるいは キャッシング どれもだ 使用者 で
 自由意志 下 所 做的 決定，怨 不得 發卡銀行。
自由意志 ...の下 するところの する の 決定 恨む できない カード発行銀行

(3b) リボ払いでのショッピングやキャッシングといった行為は、個人の自由意思で行なったことなのだから、カード発行銀行を恨むべきではないという人もいる。

上の例は、クレジットカード及びキャッシュカードの氾濫が台湾で社会問題になったことに関する記事である。(3a)では節と節の因果関係が明確に示されていないのに対し、(3b)では最後の2つの節の間に順接(帰結)を表す接続助詞「から」が差し込まれている。そうすることにより、2つの節の因果関係がより強調され、そのつながりも強化されているのである。

中国語と日本語における接続詞の使用に関する違いは、両言語の構造上の相違に由来していると考えられる。中国語は文と文の並列関係を重視しており、接続詞の使用に関しては自由度が高く、接続詞が使用しなくても、言葉の順番及びコンテキストから無理なく全体の論理関係ならびに意味を読み取ることができる(Fang 1999, 呂 1998)。一方、風間他(2004:110)が「言語によっては文を並列するだけで、特別な接続辞を使用しない頻度が比較的高いものもあるが(英語など)、日本語では文と文の間に存在する意味的な関係はできるだけ接続辞を使用して表す傾向が強い」と述べているように、あるまとまった内容を日本語らしい日本語で表現するためには、適切な接続表現を用いることが不可欠である。言い換えると、日本語という言語は、文と文のつながりを示す際に接続詞に依存する傾向があると言える。

接続詞以外に、繋ぎ言葉として機能している副詞(句)が、翻訳者によって文と文の間に差し込まれている例も本研究のデータで多数見られた。

(4a) 而 馬英九 領軍 的 國民黨 未 能 乘勢 拿下 高雄市、親民黨 主席
一方 人名 率いる の 国民党 ない できる 勢いに乗ずる 勝ち取る 地名 親民黨 主席
 宋楚瑜也 在 敗 選後 宣布 退出 政壇，泛藍 再一次 面臨 整合 挑戰。
人名 も に 敗れる 選挙後 発表する 立ち去る 政界 漂う ブルー 再び 直面する 統合 挑戦

(4b) 一方、馬英九主席が率いる国民党は高雄市長の座を奪い返すことができなかった。
また、親民党の宋楚瑜主席も台北市長選に敗れた後、政界から退くと表明した。これによりブルー陣営が再び統合という課題に直面することとなった。

この例では、(4a)は全体に1つの文からなっているのに対し、(4b)は3つの文に分割されて訳され、さらに分割されたところに接続詞「また」及び繋ぎ言葉「これにより」が翻訳者により付け加えられている。

原文における文が長い場合、その文の構造に沿って翻訳すると、不自然な日本語になりうるだけでなく、理解を妨げることも考えられる。したがって、本研究のデータにおいて、翻訳者はしきりに原文の長文を分割して訳し、さらに原文にはなかった接続詞や繋ぎ言葉を追加することがある。

③強調

3 つ目のカテゴリーは「強調」である。Séguinot(1988:108)は明示化の形態について、“an element in the source text is given a greater importance in the translation through focus emphasis, or lexical choice”と述べている。つまり、翻訳のプロセスにおいて、翻訳者はしばしば原文のある要素に焦点を当て、強調したり、ことばを選択することによって、訳文の中でそれらの部分を浮き立たせることがある。以下はその例である。

(5a) 但 停航 不是 辦法；
しかし 減便 ではない 解決策

(5b) しかし減便は根本的解決策とはならない。

(5b)では、「解決策」の前に、原文にはなかった「根本的」という強調の機能を持つ形容動詞が付け加えられ、「減便を通して一時的に問題を解決できたとしても、それは完全な解決策とはならない」というニュアンスを際立たせる。

さらに、句読記号を用いることで、強調の機能を果たす明示化の例もある。日本語における句読記号のバラエティは比較的少ないため、本研究で見られた例はすべてカギ括弧を用い、訳文の中にある特定の要素を強調する例である。

(6a) 國民黨 一直 沒有 對 本土化、新台灣人 論述 做 過
国民党 ずっと していない ...に対する 本土化 新台灣人 議論する 行う ...したことがある
深刻 思索。
深い 考える

(6b) 国民党内では「本土化」や「新台灣人」に関する深い議論が展開されていない。

この例の中の「本土化」及び「新台灣人」は、いずれも台湾において選挙の際に掲げられた

スローガンであるが、(6a)の中では特別な処理が施されていないのに対し、(6b)においてはカギ括弧によってくくられている。花岡(2001:45)が「カギ括弧は、その中の要素を際立たせる役目を果たし、語彙レベルで、またテキストレベルで結束性を高めるので明示化のツールと考えることができる」と述べているように、非言語の情報であっても、翻訳プロセスにおいて明示化の役割を果たすことができるのである。

④含意の表出

原文の作者が文章を書く際、しばしば比喩、掛詞、熟語(特に四字熟語)などの手法を用い、文章に字面以外の含意を持たせることがある。これらは主にコンテキストに依存する、もしくは言語内の情報であり、前後の文脈の手がかりや原文の言語に対する理解で、その意味を導きだすことができる場合が多い。しかし、花岡(2001:41)が「含意が文化及び言語の違いにより、解読困難あるいは不自然である場合に、目標読者にわかりやすく明示する工夫がなされる」と述べているように、含意は短い表現に意味が凝縮されるという特徴があり、訳文の読者にとってはそれが理解の妨げになりうるため、翻訳者はそれを明示して訳す傾向がある。次の場合はメタファー表現が明示化された例である。

(7a) 僑銀 下嫁 美商花旗，這是 國內 銀行「後段班」成員 順利 退場 的 新
華僑銀行 嫁ぐ シティバンク これだ 国内 銀行 下位クラス メンバー 順調に 退場 の 新たな
 模式，可以 帶動 金融改革 加速 落實， 業界 和 官員 都 樂觀其成。
モデル できる 促す 金融改革 加速 着実にする 業界 と 官員 みな その成功を楽観視している

(7b) 華僑銀行とシティバンクの合併は、国内の 下位銀行が市場から退場するための成功
 モデルとなり、今後の金融改革の加速を促すことになると、政府も業界も成功を期待
 している。

この例は、台湾における金融業界の改革に関する記事である。(7a)では銀行間の合併を男女の婚姻に見立て、また銀行のランキングを学校のクラスに例えている。それに対し、(7b)では、この2つのメタファーにおける含意を明示して訳出している。

また、熟語(特に四字熟語)や慣用句も翻訳における明示化の対象の1つである。以下はその一例である。

(8a) 爲了 因應 新 選制， 專家 早 已 呼籲 各 候選人 必須 採取
ため 対応 新しい 選挙制度 専門家 とくに すでに 呼びかける 各 候補者 せねばならない とる
 「化敵爲友、兼容並蓄」的作法，儘量 獲取 選區 內 最 大多數
変える 敵 ...になる 友 兼ねる 包容する とともに 蓄える の やり方 できるだけ 得る 選挙区 中 最も 大多数
 選民的 認同
有権者 の 認め

(8b)そのため早くから多くの専門家は、この新しい選挙制度に対応するために、候補

者は大多数の有権者に支持されるよう、競争相手と激しく敵対するのではなく、
包容力を示すべきだと指摘してきた。

この例では、(8a)の中の「化敵為友」及び「兼容並蓄」という 2 つの中国語の四字熟語が、(8b)においては網掛け部分のように意識されている。短い表現に意味が凝縮されているという四字熟語の特徴を考慮すると、完全に意味が対応しているものがない限り、その含意を明示して訳さなければ意味が伝達できないおそれがあると考えられる。

⑤背景知識の説明

原文と訳文の読者は、言語背景が異なるだけでなく、政治、経済、文化、時事など社会全般に関する知識もほとんど共有されていない。そこで、理解を促進し、円滑な意味伝達を実現するため、翻訳者はしばしば原文の中の情報に対し、自らの主観的な判断で読者に必要と思われる背景知識を補足することがある。

ここでいう「背景知識」とは、先ほど④で触れた「含意の表出」というカテゴリーの「含意」と同様に、原文に隠されている情報である。花岡(2001)はこの二種類の情報をともに「暗示的情報の明示」というカテゴリーに分類している。しかし、前述したように、「含意」というのはコンテキスト依存・言語内の情報であるのに対し、「背景知識」はコンテキスト外・言語外の情報である。つまり、前後の文脈や言語に対する理解では導き出せない情報であると言える。この二種類の情報には本質的な違いがあるゆえ、本稿ではそれぞれ独立したカテゴリーで扱うことにした。

(9a) 受到 王建民熱潮 的 影響，中華職棒 球季 進場 觀眾 萎縮 幾 達 3 成。
受ける 王建民 ブーム の 影響 中華プロ野球 シーズン 入場 観客 減少する ～に近い 達する 3割

(9b) 今年はアメリカ大リーグでの王建民の活躍に注目が集まり、中華プロ野球の観客動員数は 3 割減となった。

この例では、(9a)の中の「王建民」は、(9b)において「アメリカ大リーグ」という所属に関する情報が付加されている。

(10a) 相對於 兩岸 自 2002 年 初 接踵 加入 世界貿易組織 (WTO) 後，中共
に対して 兩岸 から 初頭 相次ぐ 加入 世界貿易機関 ...の後 中国共産党
已 屢次 向 台灣 廠商 提出 「反傾銷」 控訴，雲林 毛巾 案 則 是
すでに 幾度も に 台湾 メーカー 提出する アンチダンピング 告訴 地名 タオル 事件 は(限定) だ
我國 第一次 援引 WTO 相關 規範 來 進行 調査
我が国 初めて 援用する 組織名 ...に関する 規範 動作に取り組む積極的な姿勢を示す 進める 調査
裁決，重要性 不容 忽視。
裁決 重要性 ...させない 軽視する

(10b) 2002 年に 台湾海峡兩岸 が相次いで世界貿易機関 (WTO) に加盟して以来、大陸

側はすでに幾度も台湾企業に対してアンチダンピングを提訴しているのに対し、我が国が WTO の規範に従って調査採決を行なったのは初めてで、その重要性がうかがえる。

この例は、中国－台湾間の貿易戦争に関する記事である。台湾は台湾海峡を挟んで中国と向かい合っているため、しばしば両国は「兩岸」という言葉で表現される。この例では、(10a)の中の「兩岸」が(10b)において「台湾海峡兩岸」と訳されており、この点で地理に関する背景知識が付け加えられている。また、その後の「中共」に関しても、台湾では「中国共産党」の略称である「中共」で中国政府を示すことがあるため、(10b)においては、翻訳者は前文の台湾海峡兩岸の文脈に沿い、「中共」を「大陸側」と明示して訳している。文中では具体的な背景知識の説明がされていないが、翻訳者が自らの政治に関する背景知識に頼り、原文を明示化させる工夫が伺える。

⑥ 構文要素の補足

本研究における明示化の最後のカテゴリーは「構文要素の補足」である。翻訳のプロセスにおいて、原文と訳文との言語構造の相違や、言語使用の習慣等の要因により、翻訳者はしばしば原文で省略された主語や目的語、動詞などの構文要素を、訳文において補って訳すことがある。文の構造を整えることで、読者の理解を容易にすることがその目的である。

(11a) 棒球 傳入 台灣 近 30 年 後，1931 年 更 由 嘉義農校 打進 日本「甲子園」

野球 入る 台湾 近く 30 年 後 1931 年 更に ...によって 学校名 進出 日本 甲子園

高中 聯賽 奪下 亞軍，成爲 第一個 發展 高峰。

高校 大会 勝ち取る 準優勝 ...になる 最初 発展 ピーク

(11b)そして、野球が台湾に入ってきてから 30 年近くたった 1931 年には、嘉義農業学校のチームが日本の甲子園で行なわれる高校野球の大会に出場して準優勝し、台湾野球は最初のピークを迎えた。

この例は、台湾野球史に関する記事である。全文は終始台湾野球に関する内容から成っているため、(11a)の最後の文では主語が明らかにされておらず、「成る」を動詞とする自動詞文の形をとっている。それに対し、(11b)では、「台湾野球」という主語が付け加えられているだけでなく、それに合わせて「迎える」を動詞とする他動詞文に変えている。こうすることにより、文の主題がより明らかになり、読者の理解を助けることもできる。

以上のように、本節では、翻訳プロセスにおいて見られた明示化現象に関して質的分析を行い、それらをカテゴリー化することで、その特徴を明らかにしてきた。次節では、明示化現象のカテゴリー別の頻度を量的に分析することで、その分布傾向及びその要因を考察する。

5.1.2 量的分析

表 3 に示したのは、本研究の平行コーパスで見られた明示化現象のカテゴリー別頻度及びその分布である。表 3 が示す通り、明示化現象は6つのカテゴリーにわたり計 730 箇所で見られた。4.1.1 で述べたように、平行コーパスの中の日本語訳文は 1973 個の文から成っているため、一文当たりの明示化現象の出現数は 0.36 箇所となる。つまり、平均して明示化現象がおよそ3つの文に一度は現れていることになる。この頻度の高さからもわかるように、翻訳のプロセスにおいて、確かに明示化は翻訳者が頻繁に採用する戦略の1つだと言えるだろう。

表 3 本研究における明示化現象の頻度及びその分布

カテゴリー	頻度	割合
背景知識の説明	210	28.8%
指示対象の明示	180	24.7%
含意の表出	117	16.0%
構文要素の補足	95	13.0%
連結関係の強化	77	10.5%
強調	51	7%
合計	730	100%

また、各カテゴリーの頻度分布に関しては、上の割合の部分からもわかるように、「背景知識の説明」が 210 箇所と全体の 28.8%を占めており、最も多く見られた。続いて「指示対象の表出」が 180 箇所・24.7%と二番目に高い頻度を示している。この2つのカテゴリーが上位を占めるという結果には、テキストジャンルによる要因が影響しているのではないかと考えられる。前述したように、本研究の平行コーパスは『光華雑誌』の中の時事報道のコラム「ニュースアイ」を採用している。台湾社会における時事問題に関する記事は、日本人読者にとっては馴染みのないものであると考えられ、読者には台湾における社会、芸術文化、政治、ビジネスなど多様な背景知識が求められる。そのため、このような知識が不十分であると考えられる日本人読者に対し、翻訳者はしばしば補助的に説明を付け加えて訳す。これが「背景知識の説明」が最も多く見られた要因であると考えられる。

続いて二番目に多く見られた「指示対象の明示」に関しても、テキストジャンルによる要因が影響を与えていると考えられる。時事問題に関する雑誌の記事というのはその性質上、新聞記事に類似しているが、新聞記事の背後では「5W1H」という原則が働いていると言われている。すなわち、“who”, “what”, “when”, “where”, “why”, “how”という6つの要素を明確に記述し、主題を明らかにすることが求められるのである。したがって、新聞記事ならびに時事問題に関する雑誌の記事においては、特に指示対象の明確化、具体化が重視されており、これが「指示対象の明示」が本研究のデータに頻出している要因であると言える。

最後に、「強調」というカテゴリーにも注目したい。本研究のデータにおいて「強調」が見られたのは計 51 箇所と、全体に占める割合はわずか 7.0%であり、最も少ないカテゴリーである。ここで言う「強調」とは、訳文の中のある要素を際立たせることにより、読者の注目をその部分に引かせる手法である。中国語には、「過猶不及(過ぎたるはなお及ばざるが如し)」という諺がある。「やり過ぎるのはちょうどやり足りないのと同じである」という意味を持つこの諺は、翻訳にも適用できると考えられる。翻訳には「原文に忠実であれ」という基本原則があり、原文からかけ離れた表現はあまり好まれず、原文が伝えようとする意味やニュアンスをなるべくそのまま正確に再現することが重視される。それゆえ、翻訳者は過剰に原文の意味を強めることを避ける傾向があり、これが「強調」の頻度が最も少ない要因であると考えられる。

5.2 比較コーパスに見られる明示化

本節では、翻訳テキストの本質を解明するため、翻訳テキストを原文から切り離し、独立した文体とみなし、同じ言語のオリジナルテキストとの比較を通して日本語翻訳テキストに明示化の特徴が見られるのかを検証する。

比較コーパスを用いた翻訳研究における最大の特徴は、原文を無視し、同じ言語の翻訳テキストとオリジナルテキストを、さまざまな指標で比較・検証することにより、「翻訳テキストに特有の、または有意に高い(低い)頻度で現れるパターンや現象」(Baker 1995:235)を抽出し、それを記述、解釈することである。仮に多数の言語で同じ特有の特徴を発見できるのであれば、それらは「翻訳の普遍的な特徴」と見なされることになる。

原文と訳文の対応関係から、明示化現象を見つけ考察するというパラレルコーパスに基づいた分析方法とは異なり、比較コーパスによる研究では頻度データを分析することがより中心となる。以下では、「文の長さ」、「Type/Token Ratio」及び「接続(助)詞頻度」という3つの指標を用いて、翻訳テキストにおいて明示化の特徴が見られるのかを検証していく。

5.2.1 文の平均的長さ

5.1.1 では、翻訳プロセスにおいて翻訳者が採用した明示化戦略を分析・考察し、それらを6つのカテゴリーに分類した。各カテゴリーは「原文になかった要素を訳文に付け加える」という点で共通していた。訳文に様々な要素を付け加えようとすると、翻訳テキストの文は冗長になる傾向があると考えられる。例えば、短縮形を正式名称で訳出する、もしくは代名詞を固有名詞で訳出するなどの手法は、単語の文字数を増やすことになる。また、接続詞を追加する、省略された構文要素を補足する、もしくは文中の特定の要素を強調するなどの手法も、文字数の増加をもたらすことになる。さらに、背景知識の説明ならびに含意の説明は、より直接的な文字数の増加に繋がるだろう。以上のように、明示化というのは文の長さとは密接な関係にあると考えられる。そのため、もし翻訳テキストにおける文の平均的長さがオリジナルテキストのそれより長いのであれば、それは翻訳テキストに明示化の特徴があるということになるだろう。

表 4 比較コーパスにおける文の数と平均文字数

	日本語翻訳テキスト	日本語オリジナルテキスト
総文字数	103,474	103,928
形態素数	68,048	65,946
文数	1,973	2,869
一文平均文字数	52.45	36.22
一文平均形態素数	34.49	22.98

表 4 に示したのは、比較コーパスにおける文及び文字・形態素に関するデータである。ここで言う文とは、句点「。」、疑問符「？」または感嘆符「！」で区切られた文字群を意味する。表に示した通り、総文字数がほぼ同じであるにもかかわらず、翻訳テキストにおける文の数は 1,973 と、オリジナルテキストのそれを大幅に下回っている。それにより、文の平均的長さに関しても、オリジナルテキストよりも翻訳テキストのほうが明らかに高い数値を示す結果となった。したがって、文の長さに関して言えば、本研究の翻訳テキストに確かに明示化の特徴が見られた。

5.2.2 タイプ・トークン率 (Type/Token Ratio)

Type-Token Ratio (以下、TTR) とは、あるテキストデータにおける type (異なり語数) と token (延べ語数) の比を表し、単語の豊富さと多様性を示す指標であるとされている。ここで言う token とは、テキストに現れる総語数を表し、type は異なる語形のみを拾い上げて算出した語数である。TTR が高ければ高いほど、単語にバラエティがあるとされている。

5.1.1 で述べたように、翻訳者は、翻訳のプロセスにおいて、理解の妨げとなる壁を取り除くため、しばしば多様な明示化ストラテジーを用い、文章の読みやすさを向上させようとする。例えば、代名詞を固有名詞で訳出すること、指示対象を明確化させること、または原文で省略された構文要素を補足し文の構造を整えること、さらに原文になかった接続詞を挿入することにより、文と文の連結関係を強化するなどがその例である。Pápai (2004:159) が "Explicitation strategies lead to lexical repetitions, consequently to less varied vocabulary." と指摘しているように、このような明示化のストラテジーは、結果的には翻訳テキストにおいて単語の重複をもたらし、ひいては単語使用におけるバラエティの低減を招くことになる。したがって、オリジナルテキストに比べ、翻訳テキストにおける TTR の数値の方が低いことが予想される。以下では、TTR という指標を用いて、翻訳テキストに明示化の特徴が見られるかを検証する。

表 5 比較コーパスにおける Type-Token Ratio

	日本語翻訳テキスト	日本語オリジナルテキスト
総文字数	103,474	103,928
形態素数	68,048	65,946
延べ語数(token) ⁹⁾	61,209	57,578
異なり語数(type)	6,918	8,418
TTR	0.113	0.146

表 5 は本研究の比較コーパスにおける TTR を示したものである。データが示す通り、翻訳テキストにおける異なり語数は、オリジナルテキストのそれを大幅に下回っており(6918:8418)、それによって TTR に関しても、翻訳テキストのほうが低い数値を示している(0.113:0.146)ということが明らかになった。つまり、オリジナルテキストに比べ、翻訳テキストは単語のバラエティに乏しいのである。この結果は先の予想と一致し、翻訳テキストに明示化の特徴が見られたと言える。

5.2.3 接続(助)詞の頻度

5.1.1 のパラレルコーパスを用いた分析では、文章の論理的関係及び結束性を強めるため、翻訳者はしばしば翻訳の過程において、訳文に接続(助)詞を付け加える傾向があることを述べた。この傾向から、同じ言語のオリジナルテキストと比べても、翻訳テキストにおいて接続(助)詞がより高い頻度で使用されることが予想できる。この予想と一致する結果は、すでに英語を対象としたいくつかの先行研究で実証されているが(Cai 2007, Chen 2003, Pápai 2004)、以下では、この連結関係に関する明示化の特徴が、本研究の日本語データにも見られるかを検証していく。

表 6 比較コーパスにおける接続(助)詞の頻度

JTT 上位 20 位			JOT 上位 20 位			上位 20 位の共通項目		
	JTT	JOT		JTT	JOT		JTT	JOT
て	1482	1353	て	1482	1353	て	1482	1353
が	213	196	が	213	196	が	213	196
と	143	116	ば	102	117	と	143	116
ば	102	117	と	143	116	ば	102	117
また	80	17	から	26	69	また	80	17
しかし	60	35	で	38	46	しかし	60	35
で	38	46	しかし	60	35	で	38	46
そして	34	10	だが	23	32	そして	34	10
から	26	69	し	8	27	から	26	69
だが	23	32	ので	23	26	だが	23	32

ので	23	26	ながら	10	18	ので	23	26
しかも	21	10	のに	7	18	しかも	21	10
例えば	18	13	また	80	17	例えば	18	13
一方	15	9	つつ	11	14	つつ	11	14
それに	13	12	例えば	18	13	ながら	10	18
さらに	11	7	つまり	2	12			
つつ	11	14	しかも	21	10			
ながら	10	18	そして	34	10			
そこで	10	6	ただ	4	10			
その結果	9	3	それでも	7	10			
合計	2342	2109	合計	2312	2149	合計	2284	2072
文字数	103474	103928	文字数	103474	103928	文字数	103474	103928
千文字当たり	22.63	20.29	千文字当たり	22.34	20.67	千文字当たり	22.07	19.94

JTT: 日本語翻訳テキスト JOT: 日本語オリジナルテキスト

表 6 は 3 つのグループで構成されている。1 番左のグループは翻訳テキストから頻度上位 20 位の接続(助)詞¹⁰⁾を抽出し、それをオリジナルテキストの対応項目と比較したものである。中央のグループは、オリジナルテキストから頻度上位 20 位の接続(助)詞を抽出し、それを翻訳テキストの同じ項目と比較したものである。一番右のグループは両テキストの頻度上位 20 位に共通した接続(助)詞を比較したものである。これらの比較結果をまとめたものが、以下の表 7 である。

表 7 接続(助)詞の比較結果

グループ	1	2	3
基準	JTT 上位 20 位	JOT 上位 20 位	共通項目
合計頻度	JTT>JOT	JTT>JOT	JTT>JOT
千字当たりの頻度	JTT>JOT	JTT>JOT	JTT>JOT
個別頻度が高い項目数	JTT(13) > JOT(7)	JTT(7) < JOT(13)	JTT(8) > JOT(7)

JTT: 日本語翻訳テキスト JOT: 日本語オリジナルテキスト

表 7 の結果から、まず接続(助)詞の合計頻度に関しては、3 つのグループのいずれにおいても、翻訳テキストのほうが高いことがわかる。また、個別の頻度に関しても、表 6 の太字で表示した部分のように、グループ 1 においては 20 項目中の 13 項目で、グループ 3 においては 15 項目中の 8 項目で、翻訳テキストの方が高い頻度を示していることが明らかになった。

以上のように、接続(助)詞に関しては、確かにオリジナルテキストより翻訳テキストにおいて頻繁に使用されていることがわかる。その差はそれほど顕著なものではないが、3 つのグループのいずれも類似した傾向を示していることから、翻訳テキストに明示化の特徴があると言えるだろう。

以上のように、比較コーパスのデータを通して、「文の長さ」、「TTR」及び「接続(助)詞の頻度」という3つの指標を用いて、翻訳テキストに明示化の特徴が見られるかを検証してきた。その結果、明示化傾向を表す3つの指標すべてにおいて、翻訳テキストのほうがオリジナルテキストより高い数値を示した

ただし、先述したように、日本語翻訳テキストを対象とする比較コーパスを用いた研究がこれまで行われてこなかったため、上に挙げた3つの明示化傾向を表す指標に関しては、あくまでも本研究が先行研究を参考にして定めたものである。これら3つの指標を基準とした比較分析の妥当性に関しては、より幅広い研究を積み重ねて検証する必要があるが、本稿が日本語翻訳テキストの研究における新たな方法論的提案と見なすこともできるだろう。

6. まとめ:

本稿はコーパスに基づいた翻訳研究(CTS)のアプローチを用いて、中国語から日本語に翻訳した雑誌の時事報道記事における明示化の現象について考察した。まずはパラレルコーパスを用いて、中文和訳のプロセスにおける明示化の事例を抽出し、それらをカテゴリー別に分類した。次に比較コーパスを用いて、3つの明示化を測る指標で日本語翻訳テキストにおいて明示化の傾向が見られるかを検証した。最後に、第5節の分析結果を、リサーチ・クエスチョンに答える形でまとめることにする。

(1) 中国語を日本語に翻訳するプロセスにおいて、明示化の現象が見られるのか。もし見られるならば、それはどのような形で現れるのか。

本研究のパラレルコーパスにおいて、日本語翻訳テキストにおける明示化の現象は計730箇所で見られた。したがって、日本語の時事問題に関する雑誌記事の翻訳テキストに、明示化の特徴が見られることが明らかになった。

パラレルコーパスを用いて分析した結果、以下の「指示対象の明示」、「連結関係の強化」、「強調」、「含意の表出」、「背景知識の説明」及び「構文要素の補足」という6つのカテゴリーにおいて、明示化現象が見られた。各カテゴリーの出現頻度の順位に関しては、「背景知識の説明」が全体の28.8%と最も多く見られた。続いて「指示対象の明示」が24.7%、「含意の表出」が16.0%と続き、4位と5位はそれぞれ「構文要素の補足」(13.0%)と「連結関係の強化」(10.5%)であった。最後に、最も出現頻度の低かった「強調」に関してはわずか7.0%であった。

(2) Baker(1993)は明示化が「翻訳の普遍的特徴」であると主張しているが、本研究の日本語の比較コーパスにおいても、明示化の傾向は見られるのか。

比較コーパスによる分析の結果、翻訳テキストには、「文が長い」、「TTRが低い」および「接続詞の多用」という明示化の特徴があることが明らかになった。つまり、これら3つの明示化の指標すべてにおいて、翻訳テキストのほうがオリジナルテキストより高い数値を示したことにより、本研究の日本語の比較コーパスにおいても、明示化の傾向が見られたことになる。

Baker(1993)は、明示化を「翻訳の普遍的特徴」として捉えるためには、あらゆる言語の組み合わせでの明示化現象を研究することが必要であると主張している。つまり、「普遍的特徴としての明示化」というパズルを完成させるためには、本研究の比較コーパスで対象となった日本語のように、さまざまな言語というピースにおいて明示化現象が見られることを証明しなくてはならないのである。本研究は、これまで比較コーパスを用いて研究されることのなかった日本語における明示化現象について明らかにしたという点で、印欧語を中心とした先行研究とは異なる観点から明示化現象の普遍性を裏付ける一助となったといえるだろう。

.....

【著者紹介】劉 明綱(リュウ メイコウ/LIU Ming-Kang)。名古屋大学大学院国際開発研究科(国際コミュニケーション専攻)博士前期課程修了、同後期課程在学中。コーパスに基づいた研究手法を用いて、翻訳テキストの普遍的な特徴についての研究に取り組んでいる。

【註】

- 1) 利用に関しては「光華画報雑誌社」から使用許可を得ている。
- 2) 中国語では、「中文自動断詞系統 1.0」という。詳細は以下の中国語の URL を参照。
<http://ckipsvr.iis.sinica.edu.tw/>
- 3) 京都大学情報学研究科-日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所共同研究ユニットプロジェクトを通じて開発されたオープンソース形態素解析エンジンである。本研究では MeCab 0.97 を使用している。詳細は以下の URL を参照。
<http://mecab.sourceforge.net/>
- 4) 国立国語研究所が開発した形態素解析辞書である。本研究は UniDic-1.3.9 を使用している。詳細は以下の URL を参照。<http://www.tokuteicorpus.jp/dist/>
- 5) 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科松本研究室が開発した形態素解析エンジンである。詳細は以下の URL をご参照。<http://chasen-legacy.sourceforge.jp/>
- 6) <https://www.tokuteicorpus.jp/dist/index.php>
- 7) ここで言うオリジナルテキストとは、訳文に対する原文ではなく、自然言語のテキストである。
- 8) 『週刊 AERA』及び『週刊朝日』に関しては朝日新聞社知的財産センター、『週刊ダイヤモンド』に関してはダイヤモンド社から使用許可を得ている。
- 9) 形態素数から、記号類を除いた結果。
- 10) 分かち書きと品詞タグ付けの結果を一語一行に整形し、その中から「接続詞/接続助詞」(日本語)を含む行を抽出した結果。

【引用文献】

Baker, M. (1993). *Corpus Linguistics and Translation Studies: Implication and Applications*. In M. Baker, G. Francis & E. Tognini-Bonelli (Eds.), *Text and Technology: In Honour of John Sinclair*

- (pp. 233-250). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Baker, M. (1995). Corpora in translation studies: An overview and some suggestions for future research. *Target*, 7, 223-243.
- Blum-Kulka, S. ([1986] 2000). Shifts of cohesion and coherence in translation. In L. Venuti (Ed.), *The Translation Studies Reader* (pp. 298-313). London and New York: Routledge.
- Cai, P.-S. (2007). *An Investigation into the "Explicitation" Feature in the Chinese-English Journalistic Translation: A Corpus-based Translation Study*. National Kaohsiung First University of Science and Technology, Kaohsiung.
- Chen, W. (2003). *Investigating Explicitation of Conjunctions in Translated Chinese: a Corpus-based Study*. Paper presented at the Corpus-based Translation Studies Conference: Research and Applications.
- Dominic, S. (2001). Poor Relations and Black Sheep in Translation Studies. *Target*, 12, 205-228.
- Fang, M. (1999). Sci-Tech Translation and its Research in China. *Meta*, 44(1), 185-197.
- Kenny, D. (2001). *Lexis and creativity in translation : corpus-based study*. Cornwall: St. Jerome.
- Klaudy, K. (1998). Explicitation. In M. Baker (Ed.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* (pp. 80-84). London & New York: Routledge.
- Øverås, L. (1998). In Search of the Third Code: An Investigation of Norms in Literary Translation. *Meta*, 43(4), 557-570.
- Pápai, V. (2004). Explicitation- A universal of translated text? In A. Mauranen & P. Kujamaki (Eds.), *Translation universals: Do they exist?* Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Puurtinen, T. (2003). Genre-specific Features of Translationese? Linguistic Differences between Translated and Non-translated Finnish Children's Literature. *Literary and Linguistic Computing*, 18(4), 389-406.
- Séguinot, C. (1988). Pragmatics and the Explicitation Hypothesis. *traduction, terminologie, rédaction*, 1(2), 106-113.
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Vinay, J.-P., & Darbelnet, J. ([1958] 1995). *Comparative stylistics of French and English : a methodology for translation* (J. C. Sager & M.-J. Hamel, Trans.). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 王真瑤 (2005)「論中日同步口譯的清晰化現象」輔仁大學翻譯研究所修士論文 臺北
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 (2004)『言語学』東京大学出版会
- 花岡修 (2000)「放送通訳における明示化の方略」『通訳研究』創刊号: 69-84.
- 花岡修 (2001)「ニューズウィーク日本版に見られる明示化」『通訳研究』第1号: 36-52.
- 范文美 (1996)「隱含信息的處理」『翻譯評賞』香港: 書林書局
- 呂叔湘 (1998)『現代漢語八百詞』香港: 商務印書館